

G-TELP の結果と英語履修科目の関連性に関する一考察

服部 圭子¹, 長谷川 由美²,

要旨

近畿大学生物理工学部での英語教育では、プレイスメントテストおよびプレイスメントテストを兼ねた実力テストとして G-TELP を実施している。本研究の目的は、客観テストを用いて学生の成績と履修科目の実態を把握し、今後の英語カリキュラムの開発と発展に向けての検証の一端とすることである。本稿では、平成 24 (2012 年) 度入学生の 1 年次と 3 年次の成績を比較し、G-TELP³の点数差が大きいグループと小さいグループを対象に、それらの学生の履修科目を用いて分析した。その結果、「英語演習」「オーラルイングリッシュ」および「TOEIC」「英語特別演習」科目を履修選択した者には平均値に差がない可能性が高かった。また、1 年生次と 3 年生次の点数の伸び方が大きい学生は「総合英語」を履修している傾向があり、伸び方が小さい学生が「英語プレゼンテーション」を受講している傾向があることが分かった。

キーワード：英語教育、G-TELP、カリキュラム開発、評価

1. 緒論

近畿大学生物理工学部では、生物工学科、遺伝子工学科、食品安全工学科、システム生命科学科、医用工学科の学生を対象に、従来は、1 年生の入学時と後期後半、2 年生後期後半の 3 回 G-TELP を用いて、プレイスメントテストおよびプレイスメントテストを兼ねた実力テストを実施していた。それに加え、平成 24 年 (2012 年) 度入学者からは、3 年生後期後半に実力テストを加えることが可能となった⁴。そこで、平成 24 年度 (2012) 年度 3 年生を対象に、学生たちが 1・2 年生で履修した英語科目を遡って調べることで、3 年間の学生の英語力推移の観察を行うこととした。G-TELP とは、文法 (Grammar)、聴解 (Listening)、読解と語彙 (Reading & Vocabulary) の 3 セクションから構成されているテストで、各パートは 100 点満点で合計 300 点のテストである。本調査の目的は、客観テストである G-TELP による学生の成績の変化を、履修科目との関係で分析することにより英語カリキュラムの検証を行い、今後のカリキュラム開発と発展に備えることである。

森住ら (2010) ⁽¹⁾ は「外部テストの大学英語教育に与える影響は無視できない」と述べ、プレイスメントテストについて、「受講者を適切なコースに配置するテストであり、現在多くの大学で実施されている習熟度別テスト編成は、何らかのデータや個人の申請などに基づいて行われている。」と説明している。また、診断テストの実施によって受講者の「文法・語彙・技能のうちどこが強く、どこが弱いのかを判断し、以後の学習にその結果を活かしていくもの」だと述べている。本学部で用いている外部テストである

原稿受付 2016 年 10 月 19 日

本研究は近畿大学生物理工学部戦略的研究 No.13-II-2 の助成を受けた。

1. 近畿大学生物理工学部 教養・基礎教育部門, 〒649-6493 和歌山県紀の川市西三谷 930

2. 近畿大学生物理工学部 教養・基礎教育部門, 〒649-6493 和歌山県紀の川市西三谷 930

3 <http://www.g-telp.jp/> 国際英検 G-TELP (General Tests of English Language Proficiencyの略)。

4 平成 26 年度の生物理工学部戦略的研究費により、3 年次に G-TELP を用いた実力テスト実施が可能となった。

G-TELP でも文法・聴解・読解と語彙の側面からの結果を得ることができる。英語の専任・非常勤を含む日本人教員が担当する基幹科目では G-TELP の文法と読解のセクションの結果を、英語ネイティブ講師が担当する科目では文法と聴解のセクションの結果を重視してクラス分けを行っている。本研究ではさらに、テスト結果を有効利用し「その結果を生かしていく」試みとして、今後の英語科目設定の資料とすることを念頭に、個々の学生の 1 年生および 3 年生時の総合的な成績の伸び方と履修科目との関係を調査する。

2. 調査方法

本章では、研究課題、調査対象と期間、方法および調査手順について述べる。

2. 1 研究課題

今後の英語関連科目に関するカリキュラム開発を検討するためのひとつの材料として、英語科目履修が義務付けられている「1 年生時から 3 年生時への英語総合力の伸び方」と「英語科目の履修」に関して、以下の研究課題を設定した。

(1) 1 年生時と比べて 3 年生時の英語能力は伸びているのか。入学時にプレイスメントテストを受験し、かつ 3 年生時に G-TELP を受験した学生を、入学時の成績をもとに成績上位グループの学生と成績下位グループの学生に分けた場合、それぞれのグループでは英語能力の伸び方に違いがあるのか。

(2) 3 年生終了時までにはどのような科目を履修した学生の英語能力が伸びているのか。G-TELP の伸び方が大きいグループの学生と伸び方が小さいグループの学生では、違いがあるのか。

2. 2 調査対象と期間

調査は 2012 年から 2014 年にかけて実施した。前述のように、G-TELP は 1 年次から 3 年次の間に 4 回実施されるが、調査対象は初回（1 年生時 2012 年 4 月）と最後（3 年生時 2014 年 12 月）の 2 回とも受験している学生とした。各学科における対象者は、表 1 に示す通りである。なお、医用工学科の学生は単位取得条件が他学科と異なるため、今回は対象外とした。

表 1 各学科の対象者（人数）

システム	34 人
遺伝子	34 人
食品	16 人
生物	30 人
人間	22 人
医用	対象外*単位取得条件が異なるため
合計	136 人

当該の学生が履修可能であった英語基幹科目は、「英語演習 1・2」「オーラルイングリッシュ 1・2」（1 年生対象科目）、「英語演習 3・4」「オーラルイングリッシュ 3・4」（2 年生対象科目）、および「総合

英語 A・B」(3年生対象科目)である。発展科目としては「TOEIC1A・2A・3A・4A」「英語特別演習 1A・1B」(2年生対象科目)、「英語特別演習 2A・2B」(3年生対象科目)に加え、「英語スキル上級 A・B」「海外研修(英語)」(1年生以上)である。今回の調査では、最後の2つの1年生以上の発展科目については調査対象外とした。

2. 3 調査手順

調査手順は以下の通りである。

- (1) G-TELP 受験者全体の平均点、最大値、最小値を出す。
- (2) 入学時と3年生時の G-TELP の成績を用いて、G-TELP の伸び方が大きいグループの学生と伸び方が小さいグループに分ける。
- (3) 3年終了時まで履修した科目に関して伸び方が大きいグループの学生と伸び方が小さいグループに属する学生の結果に対し、有意差を調べる。

なお、本研究では、G-TELP のレベル3をカスタマイズした問題を用いている⁵。

3. 結果と考察

本章では、G-TELP を受験した136名の学生全体の G-TELP の結果を示した上で、入学時と3年生時の伸び方が大きいグループの学生と伸び方が小さいグループに分けて、履修科目との関係について分析した結果について述べる。

3. 1 G-TELP 受験者全体の結果

入学時と3年生時の G-TELP 全体(136人)の平均点・最大値・最小値は次の表2に示す通りである。全体として、平均点は160点から168点になり8点上がっていることがわかる。

表2 G-TELP 全体(136人)の入学時と3年12月時の平均点・最大値・最小値

	入学時				3年12月			
	文法	聴解	読解	合計	文法	聴解	読解	合計
平均	59	54	46.8	160	55	61	52.1	168
最大値	95	90	83	—	95	95	92	—
最小値	20	20	17	—	15	20	8	—
標準 偏差	15	13.34	15.9	—	18	16	17.4	—

3. 2 成績の伸び率

点数が伸びなかった学生のグループ(136名中、約1/3の46名)と点数が伸びた学生のグループ(136名中、約1/3の46名)の入学時と3年次の G-TELP のスコアを比較すると次のようになる。点数が伸びな

⁵文法と読解・語彙はレベル3、聴解はレベル4(易)を用いた問題を利用している。G-TELP によると、受験者を集約した平均値データは、文法平均(レベル3)55.8点、聴解平均(レベル4)52.8点、読解・語彙(レベル4)49.3点である。

かった学生のグループの場合、聴解と読解は大きくは下がっていないものの、文法、聴解、読解・語彙のすべてセクションの点数が下がっており、特に文法の点数の下がり方が著しい。点数が伸びた学生のグループは、全体の平均が入学時とくらべて3年生時には44.3点上がっており、すべてのセクションのスコアが上がっているが、特に聴解と読解のスコアの伸びが大きい。

表 3-1<点数が伸びなかった学生のグループ>

	入学時				3 年 12 月				入学時 -3 年
	文法	聴解	読解	合計	文法	聴解	読解	合計	
平均	62.3	57.9	47.7	167.9	48.4	56	44.1	148.5	-19.4
最大値	95	90	79	—	95	90	75	—	—
最小値	25	35	21	—	15	20	8	—	—

表 3-2<点数が伸びた学生のグループ>

	入学時				3 年 12 月				入学時 -3 年
	文法	聴解	読解	合計	文法	聴解	読解	合計	
平均	51.4	48.3	41.4	141.1	60.5	66.0	58.9	185.4	44.3
最大値	80	70	83	—	90	90	92	—	—
最小値	20	30	17	—	35	35	25	—	—

3. 3 成績と履修科目

以下の表 4 は、1 年生時から 3 年生時までの各科目の履修者数である。各科目において 1 年時と 3 年時の差が小さい下のグループと、差が大きい上のグループに属する履修者数が示されている。対象は、1 年の入学時にプレイスメントテストとして G-TELP を受験した学生の中で、3 年生時にも同テストを受験した 136 人である。3.2 で示したとおり、1 年目と 3 年終了時の伸び方が大きい 1/3 と伸び方が小さい学生が各々 46 名となり、その後の英語科目を履修した各々のカテゴリーに入る学生数が見て取れる。

「英語演習 1・2」はどちらのグループも全員が履修している。そのほかの科目の各グループ履修人数を比べたところ (t 検定)、「総合英語 1・2」と「英語プレゼンテーション A・B」のみににおいて有意差がみられ ($p < 0.01$)、その他の科目の履修者数に於いては有意差がみられなかった。「総合英語 1・2」を履修した学生は入学時と 3 年 12 月時に受験した G-TELP のスコアが伸びた傾向があり、また反対に「英語プレゼンテーション A・B」を履修した学生はスコアが伸びなかった傾向がみられる。

表 4 各科目の履修者数⁶

科目名	履修者数		
	全員	伸び方が小さいグループ	伸び方が大きいグループ
英語演習 1	136	46	46
英語演習 2	136	46	46
英語演習 3	118	39	41
英語演習 4	108	36	36
オーラルイングリッシュ 1	130	43	43
オーラルイングリッシュ 2	120	41	39
オーラルイングリッシュ 3	95	32	31
オーラルイングリッシュ 4	85	32	27
総合英語 A	24	6	11
総合英語 B	24	6	11
TOEIC 1 A	32	8	14
TOEIC 1 B	34	13	12
TOEIC 2 A	8	3	3
TOEIC 2 B	7	2	2
サイエンスイングリッシュ A	69	22	24
サイエンスイングリッシュ B	73	23	27
英語プレゼンテーション A	20	9	4
英語プレゼンテーション B	20	10	4
英語特別演習 1 A	25	6	14
英語特別演習 1 B	24	9	9
英語特別演習 2 A	19	6	7
英語特別演習 2 B	17	8	4

3. 4 入学時の成績との比較

1 年次の G-TELP の結果を用いて成績上位グループと成績下位グループを形成し、1 年次と 3 年次の成績の伸び方を比較したところ、表 5 のようになった。

⁶ 緑=1 年 水色=2 年 グレー=3 年 黄色=1 年生以上である。

表 5 入学時の成績と伸び率

	伸び方が大きいグループ	伸び方が小さいグループ
1年のG-T E L P 上から 46 位以内の学生	5 人	22 人
1年のG-T E L P 下から 46 位以内の学生	27 人	9 人

1 年次に上位 46 番に入っていた学生が、伸び方が小さいグループに 22 人入っており、伸び方が大きいグループには 5 人入っていた。逆に、1 年生の G-T E L P のスコアが下位 46 番に入っていた学生が、伸び方が小さいグループに 9 人入っていて、伸び方が大きいグループには 27 人入っていた。

3. 5 考察

「1 年生時と比べて 3 年生時の英語能力は伸びているのか。1 年生時の G-T E L P の成績上位グループと成績下位グループでは、違いがあるのか。」という研究課題については、対象学生全体（136 名）では、3 つのセクションの合計点は 160 点から 168 点へと上昇しており平均値が上昇していたといえる（表 2）。ただし、聴解と読解セクションの点数は上昇しているが、文法セクションの点数は下がっている。

表 3 では成績の伸び方の違いを示したが、表 3-2 にあるように、伸び方が大きい学生のグループの学生は聴解と読解のスコアの伸びが大きく、大学在学中に聴解と読解力をかなりつけたことになる。反対に、表 3-1 に示した伸び方が小さい学生のグループの学生は、文法力が弱くなってしまっている。入試を経て高校を卒業した直後は文法を覚えていたが、大学に入って日が経つにつれて、文法を忘れてしまったのであれば、その対応を考えていく必要もある。

1 年次と 3 年次の成績の伸び方を比較した表 5 では、1 年生時の G-T E L P の成績上位グループの学生は伸び方が小さいという結果になっている。学年の全学生が受験することを念頭において G-T E L P のレベルを選択しているため、テストスコアに上限があることなどの要素を考えると、1 年生時に既に高得点を取っていた学生は、それ以上の高得点をとるのが難しいのかもしれない。反対に、成績下位グループ学生の伸び方が大きいのは、学生たちの中にあった伸びしろが授業を通して刺激され、テスト結果に表れたのだとも考えられる。学部の英語教育の方針として、受験時には英語を暗記科目として捉えていたかもしれない学生の考え方を転換することを念頭においていることによる影響もあろう。後述のように、成績下位グループに属する学生を対象とした科目を設定していることの効果かもしれない。これらについては、さらに調査する必要がある。

「3 年生終了時まででどのような科目を履修した学生の英語能力が伸びているのか。G-T E L P の成績の伸び方が大きかったグループと伸び方が小さかったグループでは、違いがあるのか」という問いについては、「総合英語 1・2」は伸び方が大きかったグループに属する学生が履修している傾向が高く、「英語プレゼンテーション」は伸び方が小さかったグループに属する学生が履修している傾向が高いことがわかったが、そのほかの科目では違いは見られなかった（表 4）。

2012 年度入学生の場合は、1 年生のときのスコアと 3 年生のときのスコアの伸び方が小さい学生の方が「英語プレゼンテーション A・B」を履修している傾向がある。理系学部の学生であるため、より研究志

向を持つ学生が「サイエンスイングリッシュ」という名称の科目を履修しているとも考えられる。さらに 3 年生次に 1 単位履修しなければならないという規定に沿って、それ以外の学生は同時並行の「英語プレゼンテーション」を履修している場合もある。理系学生にとっては、「英語プレゼンテーション」も重要な科目であるため、平成 26 (2014) 年度の新カリキュラムからは、両科目の名称を「理系英語 3・4 (コンプリヘンション)」「理系英語 3・4 (プレゼンテーション)」に変更している。

「総合英語」は、1 年生の 12 月に受けた G-TELP のスコアが低いいため、この科目を受講することを指定された学生のみが受講しているクラスである。英語が苦手な基礎力を確認することを目的とした少人数クラスに配属された学生のスコアの伸びが大きかったといえる。「総合英語 A・B」を履修した学生の成績の伸び方が大きかったことを考えると、リメディアル教育の強化が叫ばれる今日、成績下位グループの学生に対する基礎固めを主とした少人数制のクラス導入について、さらに検討していく可能性が示唆されたともいえる。

4. 今後の課題

本研究では、近畿大生物理工学部の生物工学科、遺伝子工学科、食品安全工学科、システム生命科学科、人間工学科の学生を対象に、3 年間の英語学習を修了した折の英語力の伸びについて、入学時と 3 年生時の G-TELP の点数の差が大きいグループと小さいグループの学生が履修した英語科目との関係で検証した。今後の課題としては、G-TELP の文法・聴解・読解と語彙の各セクションの伸び方と学生が受講した科目の内容や目標との関連の分析などがある。

また、今回対象とした平成 24 (2012) 年度入学生は旧カリキュラムの学生である。平成 26 年度 (2014) 年度からは新カリキュラムを導入しているが、当該の学生は平成 28 (2016) 年度に 3 年生となるため、新カリキュラムで履修する学生を対象とした分析は本年度以降に実施予定であり今後の課題となる。新旧カリキュラム双方における学生の成績および履修実態が分かれば、平成 30 (2018) 年度から施行予定の新カリキュラム検討に向けての材料として有効であると期待される。

5. 参考文献

- (1) 森住衛、神保尚武、岡田伸夫、寺内一(2000).「テストィングと評価」『大学英語教育学—その方向性と諸分野』英語教育学体系, 第 1 巻. 大修館書, pp.252-262.

英文抄録

The Relationship between G-TELP Scores and the English Courses Students Registered

Keiko Hattori¹, Yumi Hasegawa²

Kindai University, Faculty of Biology-Oriented Science and Technology conducts placement tests using the G-TELP test. The purpose of this study is to analyze the difference in scores over a three-year period due to increased English ability and to see their relation with the English courses that students had taken. We examined tests given in the first year and the third year of the program. The results show that the average G-TELP score of those students who attended 'Basic English', 'Oral Skills (English)', 'TOEIC', and 'Language Seminar (English)' did not change significantly. However, students who attended 'Essential English' and those who attended 'English Presentation' had a significant difference in their scores, the former a strong increase, and the latter a considerable increase. The authors hope to utilize the results for curriculum development for English Education for the faculty in the future.

Key words: English Education, G-TELP, Curriculum Development, Evaluation

1. General Education Division, Kindai University, Wakayama 649-6493, Japan

2. General Education Division, Kindai University, Wakayama 649-6493, Japan